世界の工場の「マザー」役

ホンダ埼玉製作所(狭山市)

ホンダ（本田技研工業）の埼玉製作所は、同社として四輪車の基幹工場であり、世界中に展開する製造拠点を指導する役割を担う「マザー工場」でもある。現在海外需要が旺盛でフル操業状態にあり、二〇一〇年にはやはり県内で東上線沿線の寄居町に新工場を立ち上げる計画を明らかにしている。総務課の橋本勝彦課長に聞いた。

年52万台、一貫生産

―この工場は埼玉県内でも最大級と思いますが、どのくらいの規模があるんですか。

橋本　昭和三十九年、オリンピックの年にできました。(敷地の)規模は三十八万五千平米。よく、紹介するときには東京ドーム八個分と表現しますが、建坪では、四十一万平米くらいあります。都市型工場ということで、二階建てとか三階建てで、狭い敷地を有効的に使い生産活動を行っています。隣は線路ですし、もう出っ張るところがないんですね。

―さらに生産を増やすには（計画中の）寄居工場ということですね。

橋本　やはりホンダとして全世界の需要を考えると、供給力が不足しますので、寄居に造ろうと。今この埼玉製作所では年間五十二万台生産していますので、今度、寄居ができれば二十万台くらい上乗せになり、両方で七十二万台位を埼玉県での生産高にしていきたいと考えています。

―東武東上線の沿線には、元々和光工場がありましたね。

橋本　もともと、ホンダが東京に出てきた時は十条でしたが、手狭だとの理由で、和光（当時は白子）工場はスタートしたんです。その後昭和三十四年に鈴鹿（三重）工場を造り、さらに五年後に埼玉製作所狭山工場ができました。当時は、和光工場と狭山工場は同じ埼玉製作所の組織でした。和光では、狭山用と海外向けのエンジンを作っていたんですが、平成十三年にこちらへ移したんです。それから狭山工場はエンジンから車体まで一貫生産する工場になったんです。

―現在に至るまで、二輪車は作っていないんですか。

橋本　僕が入社した昭和五十七年ごろは狭山工場でも作っていましたね。和光工場も昔は、二輪も作っていました。

中大型車は狭山だけ

―現在は車種でいうと、どういうものを作っているのか。

橋本　車種は九機種十三タイプ。ホンダでいう、中・大型車をつくっている工場です。最近ではCR・Vの新型を十月に発売しました。国内の四輪生産拠点は、鈴鹿とここしかありませんので、作っている機種がだぶっていることはないです。

―国内は鈴鹿とここしかないってことですが、世界全体のなかで狭山工場の役割分担は。

橋本　生産台数は埼玉製作所五十二万台ですけども、世界の生産拠点のマザーになっている領域が多いんですね。機種にもよりますが、たとえばアメリカだとかヨーロッパだとかの工場のマザーはうちが持ってる。マザー機能と言うのは、最新の生産技術の発信だとか、人を派遣するなど、立ち上がり支援をするという位置付けです。

―たいへん重要な役割を担われているということですね。

橋本　やはり、日本で開発してますから。ここで作って、量産して、それで移管をしていくというのが、今までのやり方です。ただ、タイムラグは大分、短くなりました。最近では、世界同時立ち上がりとか言い始めています。

―ホンダとして、先端的、戦略的なものはここで作られることが多いということですね。

橋本　はい。ですからCR・Vも、これからアメリカや中国などで、立ち上がり始めます。

―開発部隊は、ここにいらっしゃる。

橋本　いや、栃木です。栃木で開発して、ここで形にしていく。

フル生産で土曜も出勤

―景気、稼働状況は。

橋本　今はフル生産です。国内の販売は厳しいのですが、世界的には非常に好調です。うちは週休二日なんですけども、この、十月以降「休日買い上げ」と言い一ヶ月に二回、土曜日に出勤してもらって、車を作ります。

活気はありますよ。仕事としては大変だと思いますけども、やっぱり、仕事がないよりは、自分たちの作った車が売れて、乗ってもらえるっていうのは、一番喜ばしいことだと思います。

―五十二万台とおっしゃいましたか。何割くらいが輸出向けですか。

橋本　埼玉製作所で言うと二〇〇五年で六割が輸出です。

―従業員はどのくらいですか。

橋本　今、六千五百名ですね。住居で言うと、ホンダっていうのは「ホンダ村」をつくる発想がないので、社宅がないんですね。狭山と川越が多いですね。東上線沿線の人も多いですよ。志木や朝霞、小川町や寄居町や坂戸市など。

―女子はどうなんですか。

橋本　今は普通に工場のラインに女性も入ってます。一九九九年に、男女雇用機会均等法が改正施行され、深夜業ができるようになってますから、三交替をやってますよ。割合はまだ低いですが。

―寄居新工場との関係ですが、一部にはこちらが縮小されるんじゃないかという懸念があるようですが

橋本　その計画は一切ありません。今ここで五十二万台作っていて、寄居ができて七十二万台になるってことは、増量ですので。

都市対抗野球と駅伝

―この工場では、以前からクラブ活動が盛んですね。

橋本　埼玉製作所は、野球部をもっており、一番大きいイベントが都市対抗野球で、狭山市の代表で出場します。三年前が準優勝で、去年と今年がベスト八。応援の場面にも、地元の茶摘みの踊りのご協力をお願いし、市民の皆さんからも応援していただいています。

それと、陸上部は、駅伝をメインで活動しており、元旦に走る「ニューイヤー駅伝」での優勝を目指してやってます。

―最後に、ホンダと埼玉の関係、それと、東武東上線について思うことがあれば。

橋本　圏央道もすぐですし、北関東自動車道（の整備）とか、供給拠点としては非常に良くなるんだろうと思ってます。県も、今回の寄居（工場の誘致）に関しては色々、お手伝いをいただいていると思ってます。また、東上線沿線から通勤している従業員もたくさんおります。和光工場の跡地にホンダの和光本社ビルも出来ており、寄居工場も東上線沿線です。これからも今まで同様に利用させていただきたいと思います。

ホンダ埼玉製作所正門

企業

東上沿線は6団地

公団住宅の建替え

かつて東上線沿線のベッドタウン化のシンボルだった公団住宅。最近、沿線で古い公団住宅が取り壊され、建替えが進んでいる。事業を進めているのは「UR都市機構（独立行政法人都市再生機構）」という聞きなれない組織。建替えはどのような仕組みで行われているのか、同機構の大口芳秀さんに聞いた。

30年代建設分が対象

―どのような住宅を建替えているのですか。

大口　対象となっているのは、昭和三十年代の戦後高度成長期の住宅不足対策として建てられた住宅で、全国に約十六万戸あります。

沿線の何？なぜ？

―なぜ建替えなければならないのですか。

大口　三十年代の公団住宅は2DKタイプが中心で、当時は応募倍率も高かったのですが、四十年以上経過し、今の住宅と比べると居住水準が劣るようになりました。また、多くは階段式の中層住宅やテラス住宅で敷地が十分生かされていません。そこで居住水準の向上、敷地の有効高度利用を目的に、昭和六十一年から事業をスタートいたしました。

―前からそこに住んでいる人は同じところに入居できるのですか。

大口　建替えを実際にどう進めるかというと、まずいったん募集を中止し仮移転用の空き家を一定数確保し、先に工事をする地区（先工区）にお住まいの方に後に工事をする地区（後工区）の空家に移っていただきます。その後先工区の建物を壊して、そこに新しい住宅を建設し、完成後後工区の方に引越しをしていただきます。これを戻り入居と呼んでいます。

半分以上が団地に留まる

―建替えにどの位時間がかかりますか。

大口　建替えを始める時に居住者説明会が開かれ、この日から一年半までに仮移転住宅等他の住宅に移っていただき、およそ三年半程度で新しい住宅に入居できるという流れになっています。

―実際に同じ団地にとどまる人が多いのですか。

大口　新しい住宅に戻られる人は五割を超えており、最近では六割を超える団地もあります。

―建替え後の団地は、中身は昔の団地とずいぶん違うようですね。

大口　住宅希望調査で、「戻り」を希望する場合、戻りたい住宅の型式（小型からファミリー向け）をお聞きし、ほぼご希望の型式に入居いただけます。住宅設備については、床暖房・住棟内LAN等も設置、またすべて高齢者仕様でバリアフリーになっています。

家賃の減額制度

―建替えはよいけれど、家賃負担は高まりますね。

大口　戻り入居される方には、家賃の減額制度があります。どなたでも選択できるのは三種類あり、一つは住んでいる間本来の家賃の二〇％減額する方式、あとは十年間または二十年間の傾斜減額方式があります。ただ、減額適用は五〇㎡までです。

高齢者等の世帯については、一定の要件に該当する場合公営住宅に準じた家賃で入居できる制度があります。

―他の住宅に移ると。

大口　団地外に移転される方につきましては、他のUR賃貸住宅を希望される場合はあっせんしますし、五年間、移転先家賃の四〇％（二万円限度）を減額します。民間の住宅に行かれる場合もUR賃貸住宅へ移転する場合の減額に見合う額をお支払いします。

―特に戻り入居の場合、かなり優遇されているともいえますね。

大口　大変永くお住まいの方が多く、終の棲家と考えておられる方、新しいお住まいを探すのが難しい方もいらっしゃる。高齢者率も五割から六割と高い。こうした人々の居住の安定を第一に考えなくてはいけないということです。

―そもそも家賃は、どのように決めるのですか。

大口　建替後住宅の家賃は市場家賃です。

―そうであれば、減額されても家賃はやはり上がりますね。

大口　本来家賃は上がりますが、安心して戻れるよう家賃減額措置を講じているところです。

新規の賃貸住宅建設からは撤退

―高層化で、同じ団地で戸数は増えるのですか。

大口　一概にそうとはいえません。以前は、後工区にも住宅を建てていましたが、UR都市機構になりまして建てるのは基本的に戻り入居されるお客様用だけです。ただ、実際には戻り入居希望のお客様の数より少し余裕を持って作りますので、多少の新規募集もあるということです。

―建替え事業はどの位進んでいるのですか。

大口　昭和三十年代団地約十六万戸のうち約十一万戸の建替えに今までに着手しています。残りは約五万戸です。

―昔の日本住宅公団が平成十六年に（当時の都市基盤整備公団から）UR都市機構に変わる過程で、賃貸住宅に対する取り組みが大きく変わったようですね。

大口　戦後住宅が不足していた頃は国策として、大量の住宅を自ら建設しておりました。その後ある程度のストックも確保された段階で、分譲住宅の供給から撤退し、さらに、UR都市機構に移行してからは、原則的に自ら新規の賃貸住宅を建設することはなくなりました。ただ、現在保有している住宅ストックについては、しっかり管理していくということですので、古くなった団地を建替えたり、リニューアル等を行っているわけです。

東上線沿線の公団住宅建替え

実施年度	団地名(旧)	団地名(新)	所在地	管理開始年月	従前戸数
平成3年度	鶴瀬	アルビス鶴瀬	富士見市鶴瀬西	昭和32年10月	230
平成4年度	霞ヶ丘(第1期)	コンフォール霞ヶ丘	ふじみ野市霞ヶ丘	昭和34年6月	1098
平成11年度	霞ヶ丘(第2期)	コンフォール霞ヶ丘	ふじみ野市霞ヶ丘	昭和34年6月	695
平成11年度	東朝霞	コンフォール東朝霞	朝霞市仲町	昭和35年4月	435
平成13年度	上野台	コンフォール上野台	ふじみ野市上野台	昭和33年8月	2080
平成15年度	鶴瀬第二		富士見市鶴瀬西	昭和37年5月	1071